

第6章 述定と発語内行為

補足説明 「1 述定と発語内行為の結合について」の補足説明：

「2 述定+発語内行為の分類について」で議論を踏まえれば、述定と発語内行為の結合を説明する際に、今や「記述」と「宣言」という二つの発語内行為と、同一性関係と非同源性関係という二つの述定の結合だけを説明すればよいことになる。

同一性命題は、問答によって成立する。ただし、問いは、すでに返答が行う発語内行為（記述か宣言）を指示している、つまり返答による同一性関係の述定が行われる前にすでに、すでに発語内行為が指示されている。つまり、述定と発語内行為は結合している。「 $A=B$ 」の同一性（ないし「 $A \neq B$ 」の非同源性）の述定には、それを記述すること、ないし宣言することが結合している。記述でも、宣言でもなく、述定することはできない。

予想される反論：

5 予想される反論

反論1：上記のように発語内行為を区別するとき、次の反論があるだろう。

非遂行文発話によって、約束するという行為がなされているのだが、この約束する行為はどのように説明されるのだろうか？

遂行文の発話の場合、例えば「私は明日の会議に出席することを約束します」をサールは宣言だと考えた。後者の発話をすることによって、人は約束をすることになる。これは、この発話を宣言することによって、その内容である約束することを宣言することになるのであり、約束することの宣言によって、約束をすることになるのである。

それならば、非遂行文の発話についても同様に考えてよいのではないだろうか。

約束の場合：

「私は明日の会議に出席します」

これは宣言であり、この宣言において会議に出席することが宣言されている。

ただしこの宣言の内容は宣言するとただちに実現されているのではない。

しかし、未来において行うことを宣言するといってもよいのではないか。つまり、約束するとは、未来における話し手のある行為の実行を宣言することなのである。

未来における話し手の行為に関するある同一性関係が成り立つことを宣言する。

命令の場合：命令は、未来における受け手の行為の実行を宣言することなのである。

命令は、未来における受け手の行為に関するある同一性関係が成り立つことを宣言する。

表現型の場合：話し手の心的態度についてある同一性関係が成り立つことを宣言する。

「おめでとう」と思っていなくても、「おめでとうございます」ということができる。それは嘘である。つまり表現型については、主張型とどのように、嘘がありうる。

宣言型の場合：「首だ」という発話は、ある価値的な状態について、ある同一性関係がなりなり立つことを宣言する。

第7章 問答論的矛盾とそれによる共有知の超越論的証明

参考文献：

- 1 入江幸男、「問答論的矛盾」、文部省科学研究費共同研究報告書 課題番号 10410004 『コミュニケーションの存在論』、p.207-215、2001年3月

2 入江幸男「知を共有するとはどういうことか」『メタフシカ』大阪大学哲学講座発行、37号、pp.1-15、2007年3月

3 Yukio Irie, 'What's Going on, When We Share Knowledge?,' in *Philosophia Osaka*, Nr. 3, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp.37-50, 2008/3

4 Yukio Irie, 'Question-Answer Contradiction' in *Philosophia Osaka*, Nr. 5, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, 79-87, 2010/3.

1 問答論的矛盾の説明

-----上記文献4の部分訳

会話は基本的に質問と返答からなるが、質問と返答の間には論理的に奇妙な矛盾が生じることがある。この奇妙な矛盾を分析することがこの論文の課題である。最後に、この矛盾が持つ機能について暫定的な考察を加えた。

日常で「矛盾」と呼ばれるものは、大抵は論理的な矛盾（構文論的矛盾）である。これは一般的な形式として「pであり、かつpでない」と表記できるものである。これ以外に指摘されている矛盾としては、意味論的矛盾と語用論的矛盾があるだろう。

「意味論的矛盾」とは、意味論的な概念を述語にもつ文の矛盾である。たとえば次のようなものである。

「この文は偽である」

「「ヘテロロジカル」はヘテロロジカルである」(Grelling-Nelsonのパラドックス)

「語用論的矛盾」とは、発話行為あるいは発語内行為と命題との矛盾である。たとえば次のようなものである。

(A) 発話行為と命題の矛盾

「ここでは小さな声で話してください！」(と大声でいう)

「正しい発音をひてくらはい」(と不正確な発音をする)

(B) 発語内行為と命題の矛盾

「私は何も主張していない」

「私は存在しない」

「私の命令に従うな」

これらと区別される矛盾として、ある発話がそれ自体では矛盾しないが、ある特定の問答の中で矛盾をひきおこす場合がある。ここでは、そのような矛盾を「問答論的矛盾」^④と呼ぶことにしたい。これは、問いと答えの発話の間に生じる矛盾である。以下に例をあげて考察しよう。

2、純粋なタイプの問答論的矛盾

(I) 絡路を確認する問答

(1) その問答論的矛盾

声や文字が届いていることを確認するための問答は、問答論的矛盾をひきおこすと思われる。ここでは次の例で考えてみよう。

「聞こえますか」

「いいえ、聞こえません」

単に「聞こえません」という発話には、矛盾したところはない。しかし、「聞こえますか」と問われて、「聞こえません」と答えることは、矛盾している。なぜなら、聞こえなければ、そのような返答をすること自体が不可能なはずだからである。

ところで、話しかけることは、つねに同時に「聞こえますか」というメタメッセージをともなっており、それにたいして「聞こえません」と答えることがありえない以上は、返事をするときは、つねに「はい、聞こえます」であり、返事のないときには、聞こえないのか、あるいは聞こえるけれども返事を拒否しているかのど

ちらかである。

ちなみに、これによって次のことが帰結する。もし、相手が私に話しかけて、相手が聞こえるはずだと考える状況で、私が返事をしないのであれば、相手は、私が返事を拒否しているのだと理解するだろう、と予期できることになる。そこで、私は、そのような誤解を防ぐためには、つねに、話し掛けに対してすぐに応答するように、心がけていることになる。つまり、我々は他者からの呼びかけに対して、つねに答える準備をしているのである。

(2) この質問の語用論的矛盾

「聞こえますか」という質問において、答えの発話がそれ自体では矛盾していないにもかかわらず、ある問いに対する答えとなるときに矛盾が生じるのは、その問いに問題があるように思われる。その問い自体が、むしろ語用論的な矛盾を犯しているのではないだろうか。

「聞こえますか」と問うとき、相手に聞こえなければ、問うこと自体が成立しない。およそ問うことは、つねに相手に聞こえることを前提している。したがって、「聞こえますか」と尋ねることは、それ自体で矛盾している。しかし、この矛盾は、通常の語用論的矛盾とは少し異なっている。なぜなら、語用論的矛盾とは、通常は、命題行為と発語内行為とが矛盾することであるが、この問いの矛盾は、そうではなくて、発語内行為それ自体の矛盾であるように思われるからである。この点を確認しておこう。

「聞こえますか」という質問は、省略をおぎなえば「あなたは私の声が聞こえますか」という質問であり、その命題行為は、〈あなた〉を指示し、〈私の声が聞こえる〉という述定を行うことである。質問は、この述定ができるかどうかを尋ねている。普通の質問の場合、たとえば「このお皿はきれいですか」という質問の命題行為は、〈このお皿〉を指示し、〈きれい〉を述定することである。このような質問もまた、この述定ができるかどうかを尋ねている。では、「聞こえますか」という質問の奇妙さは、どこにあるのだろうか。「このお皿はきれいですか」では、〈きれい〉という述定が可能であろうと無かろうと、質問という発語内行為は成立する。しかし、「聞こえますか」では、〈私の声が聞こえる〉という述定がもし不可能であるならば、そのときには、質問という発語内行為自体が成立しない。

質問する者は、当然ながらその述定が可能か不可能かを知らない。彼がそれを知るには、質問するしかない。質問する者は、質問が成立しないかもしれないことを考慮した上で、質問の発話をする。

ところで、相手に質問が聞こえず、質問という発語内行為が成立していないとすると、彼は何をしたことになるのだろうか。単に独り言を話したことになるのではないだろう。なぜなら、対話を意図していたという点で、ただの独り言とは異なっているからである。彼は、発語内行為をしようとして意図したが、失敗したのである。ただし、できると思っていたのにもかかわらず、意外にも失敗したのではない。では、これは、できないかもしれないが的に当てようと意図してダーツを投げたが当たらなかった、という失敗と同じだろうか。違うのは、次の点である。たとえ彼が質問に失敗しても、質問の答えを知ることには成功するという点である。

(3) 語用論的矛盾の質問は有意味である

これらの問いは語用論的矛盾であるが、そのことは、これらの問いの発話が無意味であることを意味するのではない。相手に聞こえていることの確認は、コミュニケーションの成功のための最も基礎的な確認であり、そのためには、「聞こえますか」「はい、聞こえます」などの問答が有意味に行われているということが不可欠である。

電話の会話の最初に「もしもし」に対して「はい」と答えるとき、これは「聞こえますか」という質問と「はい聞こえます」という返答の意味であるとも解釈できるし、また「誰かいませんか」という質問と「はいおられます」という返答の意味であるとも解釈できる。お店に入って、誰もいないときに、「こんにちば」と中に声をかけ、「はい」と中から返事がするとき、これもまた「誰かいませんか」という質問と「はいおられます」という返答の意味であるとも解釈できる。このように我々は日常会話で、語用論的に矛盾する質問を有意味に行っているのである。

(II) 言葉の理解を確認する問答

(1) 問答論的矛盾

「日本語がわかりますか」

「いいえ、わかりません」

「日本語がわかりますか」と日本語で尋ねられて、「いいえ、私は日本語がわかりません」と答えることは、(「いいえ、私は、日本語があまりわかりません」という意味ではなくて、字義通りに理解するならば) 矛盾している。この発話は、上の質問への答えでなくて、単独で「私は日本語がわかりません」と発話されるときにも、矛盾(語用論的矛盾)しているといえる。しかし、上の質問に”I can't understand Japanese.”と答えるのならば、単独の発話として、語用論的に矛盾しないが、問答論的には矛盾する。

(2) 質問の語用論的矛盾

「私の言うことがわかりますか」と問うとき、相手がこの問いを理解しなければ、問うこと自体が成立しないのであるから、およそ問うことは、つねに相手に理解されることを前提している。したがって、「私の言うことがわかりますか」と尋ねることは、それ自体で矛盾している。この矛盾は、語用論的矛盾だと言えるだろう。

----- ここまで

他にも次のような問答論的矛盾がある。

・誠実性に関する問答論的矛盾

「真面目に話していますか」

「はい、真面目に話しています」

「いいえ、真面目に話していません。」

この否定の答えは、質問に対する真面目な返答となりえない。

・存在を確認する問答

「どなたかいませんか」

「はい、います」

「いいえ、誰もいません」

この否定の答えが、字義通りの意味で発せられることはありえない。

・他にも多様な問答論的矛盾がありうる。

2、問答論的矛盾による共有知の成立の説明

(1) 会話は、問答論的矛盾によって、論理的に必然的に、一定の仕方で構成される

会話が行われるためには、会話する者は互いにつぎのように問答することが必然的である。

「私の声が聞こえますか」「はい、あなたの声が聞こえます」

「私の言葉がわかりますか」「はい、あなたの言葉がわかります」

「あなたは誠実に話していますか」「はい、私は誠実に話しています」

もし問われたならば、互いに「相手の声が聞こえている」「相手の言葉が理解できる」「誠実に話している」と語ることが必然的に生じる。相手の声が聞こえないとき、あるいは相手の言葉が理解できないときには、問いに対する返答が行われない。何らかの問答が行われている限り、この二点が成立していることは、顕在的であれ隠伏的であれ、必然的に前提されている。

(1) 「互いに声が聞こえていること」の共有知について

A1「私の声が聞こえますか」

B1「はい聞こえました。わしの声が聞こえますか」

A2「はい、聞こえました。私の声が聞こえますか」

B2「はい、聞こえました。私の声が聞こえますか」

互いに声が聞こえていることを確認しようとするれば、これを常に繰り返さなければならない。しかし、それではいつになっても肝心の会話を始められないだろう。そこで通常は、次のような問答で確認できたと考える。

A1「私の声が聞こえますか」

B1「はい聞こえました。わしの声が聞こえますか」

A2「はい、聞こえました。」

この後の互いの声は、A1やB1と同様に、相手に聞こえていると見なす。もし聞こえなかったときには、「すみません、なんとおっしゃいましたか？」と問うだろう。あるいは「私の声は聞こえていますか」と問うだろう。もしそのように問わないとすると、それは、「私の声は相手に聞こえており、相手の声は私に聞こえている」と想定していることを示すことになる。

したがって、会話のなかでの通常の発話(聞こえているかどうかを確認するための発話以外の発話)は、同時に「あなたの言うことは聞こえています。私の声はあなたに聞こえていると思います」というメタメッセージを発していることになる。つまり、聞こえるかどうかの確認のための問答をしない時には、「あなたの言うことは聞こえています。私の声はあなたに聞こえていると思います」というメッセージを隠伏的に発していることになる。

(2)「互いに言葉を理解していること」の共有知について

A1「私の言葉がわかりますか」

B1「はいわかります。私の言葉がわかりますか」

A2「はいわかります。私の言葉がわかりますか」

B2「はいわかります。私の言葉がわかりますか」

互いの言葉がわかることを確認するとき、一度の確認で十分であるといえるとするれば、言葉の理解力は短時間では変化しないということを前提している。そこで通常は、次のような問答で確認できたと考える。

A1「私の言葉がわかりますか」

B1「はいわかります。私の言葉がわかりますか」

A2「はいわかります」

この後の互いの声は、A1やB1と同様に、相手に理解されていると見なす。もし理解できなかった時には、「すみません、今のどういう意味でしょうか？」と問うだろう。あるいは「私の言ったことが解りましたか」と問うだろう。もしそのように問わないとすると、それは、「私の言ったことを相手は理解しており、相手の言ったことを私は理解している」と想定していることを示すことになる。

したがって、会話のなかでの通常の発話(理解できているかどうかを確認するための発話以外の発話)は、同時に「あなたの言ったことを理解しています。私の言ったことをあなたに理解していると思います」というメタメッセージを発していることになる。つまり、理解しているかどうかの確認のための問答をしない時には、「あなたの言ったことを理解しています。私が言ったことをあなたは理解していると思います」というメッセージを隠伏的に発していることになる。

(3) 共有知から伝達の不可避性が生じる

以上から言えるのは、聞こえていることと、言葉を理解していることが共有知になるということである。これが成立しているとする、問いかけられたときには、返答しないこともまた、一定の態度表明になり、そのことが共有知になる。

さらに言えば、もし互いに聞こえており、互いに理解し合っていることを前提できるのならば、二人の間が出会っている時には、問いかけないことすら、一定の態度表明になり、そのことが共有知になる。

もし互いに聞こえており、互いに理解し合っていることを互いに確認しあっていないが、そのことを互いに予期していることを、互いに予期している状況では、何も語らないことで、「私是不機嫌である」というメッセージが伝わってしまうことを予期しているならば、そのことを取り消そうとしないことを相手が予期すると、予期してそのことを取り消そうとはしないならば、そのときには、わたしがそのような意図を持っていよ

うといまいと、そのような意図が伝達されてしまう。

付論：ムーアのパラドクスによる共有知の成立の説明

——上記論文3からの一部引用

(1) 自己意識と問答の必然性

夜、バス停で降りて、家まで歩く。そのとき、ふと空を見上げると満月が見える。「あっ、満月だ。どおりで、少し明るい」と思う。このとき、「満月だ」は知として意識されているのではない。そのときの私の関心は、月に向かっており、月を見ている私に向かっていてのではないからである。「満月が出ている」が知として意識されているとしたら、「私は、「満月が出ている」と知っている」と思っているということになる。

しかし、このように知を意識していないとき、私が「満月が出ている」ことを知らないのかといえば、そうではないだろう。なぜなら、もしそのとき「あなたは、満月が出ていることを知っていますか」と問われたならば、私は即座に「もちろん、知っています」と答えるだろう。私はこのとき何に基づいてこのように答えるのだろうか。おそらく、それは内観や反省に基づくのではないだろう。このように問われたときに、私の答えは、次の二つに一つである。

(1) 「はい、私は満月が出ていることを知っています」

(2) 「いいえ、私は満月が出ていることを知りません」

私は、満月をみて「満月だ」と内言したのであるから、(2)で答えることは、「満月が出ている。しかし、私は満月が出ていることを知らない。」と内言することになる。これは不条理(矛盾に似たもの)である。ゆえに、この場合に私が(1)を答えることは、必然的である。

より一般的に考えてみよう。Aさんが「p」という。そのとき、Bさんが、「あなたは、pを知っていますか」と問われたとすると、Aさんの答えは、常に、

(3) 「はい、私はpを知っています」

となる。なぜなら、もしそうでないなら、

(4) 「いいえ、私はpを知りませんでした」

となるが、このように答えることは、

(5) 「p。しかし私はpを知りません」

と発言することになるからである。これはいわゆるムーアのパラドクスに似たものであり、不条理(矛盾に似たもの)だと思われる。(厳密に言うと、「ムーアのパラドクス」と呼ばれているのは、「p。しかし私はpを信じない」という形式の発話であり、上の発話とは少し異なる。)

この(3)について、さらに「あなたは、あなたがpを知っていることを、知っていますか」と問われたならば、またしても上の場合と同じような事情によって、

(6) 「はい、私は、私がpを知っていることを知っています」

と答えることになるだろう。つまり個人の自己意識の無限の反復の可能性は、このように問答における不条理を避けるための必然性として説明することが出来る。この反復は、内観や反省などの人間の認識能力にもとづく経験的事実でも、超越論的事実でもなく、問答における論理的関係から「必然的に成立することを」説明できる事柄なのである。

(2) 共有知と問答の必然性

これと同様のことが、一人称複数形についても妥当する。例えば、ある夜、私が妻と歩いているとしよう。私が夜空を見上げて「満月だね」といい、妻も空を見上げて「そうね」と言ったとしよう。このとき二人は、「満月が出ている」ということを知っている。このとき近くにいた第三者が我々に「あなた方は、満月が出ていることを知っていますか?」と問うならば、我々は次の(7)を答えるだろう。

(7) 「はい、私たちは、満月が出ていることを知っています」

(8) 「いいえ、私たちは、満月が出ていることを知りません」

もし私（或いは妻）が(8)を答えるとする、満月が出ている。しかし、私たちは、満月が出ていることを知らない。」と答えることであり不条理である。もし私が「満月が出ている。しかし私はそれを知らない」といえば、それはムーアのパラドクスになるだろう。また、もし私が「満月が出ている。妻はそれに同意した。しかし、妻は満月が出ていることを知らない」と言うとするれば、それもまた不条理だろう。ゆえに、私は「私も妻も満月が出ていることを知っている」と必然的に考えることになる。それゆえに、私は、(7)を答えることになる。また妻も同様である。ゆえに(7)の答えがここでは必然的である。

ここでさらに「あなた方は、あなた方が満月が出ていることを知っていることを知っていますか？」と問われたならば、答えは、次の二つに一つである。

(9) 「はい、私たちは、私たちがそれを知っていることを知っています。」

(10) 「いいえ、私たちは、私たちがそれを知っていることを知りません」

(10)の返答は不条理である。なぜなら、そのとき次のように答えることになるからである。

(11) 「私たちがそれを知っています。しかし、私たちが私たちがそれを知っていることを知りません。」これは不条理である。なぜなら、このように答えるためには、私か妻の一方ないし両方が次のように答えなければならないが、次の返答はムーアのパラドクスと同様に不条理だからである。

(12) 「私たちがそれを知っています。しかし、私は私たちがそれを知っていることを知りません。」従って、我々は(10)で答えることは出来ず、(9)で返答することが問答の論理的関係から必然的である。

ここでは、「我々はpを知っている」ということについて、さらに「我々は、我々がpを知っていることを知っている」ということが成立し、かつそれは問いに応じて何度でも反復可能なのである。つまり、ここでの「我々の知」は自己意識と同じように何度でも反復可能なのである。

引用終わり

「ムーアのパラドクス」とは、次のような発話のもつ不合理性を指す。

「p。私は、pであると信じない。」

次の会話での最後の発話は、ムーアのパラドクスになる。

A 「pですか」

B 「はいpです」

A 「あなたはpであると信じていますか」

B 「いいえ、私はpであると信じていません」

ムーアのパラドクスを回避するためには、Bが「はい、私はpであると信じています」と答えることは、ある種の論理的な必然性である。

■対話が可能であるためには、相手の語ったことと自分の語ったことの記憶を共有していることが必要である。その記憶の正しさとその記憶を共有していることは、対話の中で確認される。だから、対話の成立と、共有された記憶の成立は、相互に依存している。

■ムーアのパラドクスを、問答論的矛盾で説明できないだろうか？

「あなたは私の質問を記憶できますか」

「はい、記憶できます」

「いいえ、記憶できません」

この否定の返答は問答論的矛盾である。

では次はどうだろうか。

「あなたは今pと主張しましたが、主張の意味を解っていますか？」

「はい、解っています」

「いいえ、解っていません」